

上海近代工業發展史上における日系雜工業の位置と 役割をめぐって

許 金 生

1. はじめに

上海の近代日系工業といえば、工業生産活動において約半世紀にわたり、華々しい展開を見せた日系綿紡績工業（即ち在華紡）が連想されるが、そのほかにも大量の工業部門（以下「雜工業」と記す）の草の根的な存在も確認されている。こうした雜工業について、零細性という先入観のためか既存の研究のほとんどは軽視し具体的な研究成果は殆ど見られない。¹⁾

近代上海は中国の工業中心地であると言われているが、紡績業だけの繁栄では工業中心地とはいえ、その他の近代工業もさかんに發展して、共に工業都市・上海の地位を築き上げた。かかる近代工業は上海内部から自発的に生じたものではなく、外国から移植され發展してきたものであり、その誕生と發展は、当然その移転の主体・時間・方法などに強く影響された。

日系雜工業は1880年代から上海に進出しはじめ、日本の敗戦まで各分野で活況を呈し、上海近代工業を構成する重要な一部分となった。本稿では日系雜工業の発生・發展について初歩的な考察を進め、このような日系雜工業の発生・存在が上海近代工業の発生・發展にどのような分野でいかなる程度まで影響したのか、また上海工業發展史において日系雜工業をどう位置づけ、どう評価すべきか、といった点を明らかにしてゆきたい。

2. 日系雜工業の地位について

1915年に在上海日本総領事館総領事は、上海における日本の工業的な地位について次のように評価していた。

上海の對外貿易上における日本の地位は英国に及ばざること尚遠しと雖工業上の地位に至りては電灯、電車、電話、水道、瓦斯等の如き特殊事業を除く時は英人經營のものに比し著るしき遜色なし尤も其投資額においては彼に一步を譲る。²⁾

公共事業を除いた工業分野では、1915年の日本の地位は、既に上海の工業分野の筆頭に挙げられるイギリスと比べても、「著るしき遜色なし」と自己評価されている。これは、1902年から上海で急発展してきた日本紡績工業もあわせた評価であるが、この時期の雑工業はどのように評価すべきであろうか。

同報告は当時の上海雑工業を①製絲 ②製粉 ③搾油 ④製紙 ⑤製材及燐寸 ⑥繰綿 ⑦印刷 ⑧製帽 ⑨ガラス製造 ⑩石鹼製造 ⑪製革 ⑫造船及造機 ⑬飲食物製造 ⑭電燈電話電車ガス水道という十四種に分け、飲食物製造・造船及造機・製材及燐寸・電燈電話のような特殊事業を除くと、日本がすでに十業種に投資していることを指摘している。業種別に各工業の規模を見ると、この十業種の中では、日系企業は以下の6つの分野において、1914年前後に限らず、その後の長期にわたり上海で重要な存在だった。

(1) 繰綿業

1888年に三井洋行と英・米・仏・独の商人が共同投資し、浦東に上海機器軋花局を設立した。三井がその経営を担当し、資本金7.5万両に達する同工場は、日本製綿繰機械32台を有し、一日あたりの繰綿生産高は90擔で、日本への輸出に専心した。中国最初の近代的繰綿工場として、設立当初の規模と意義はきわめて大きい。

次に登場した日系の雲龍繰綿工場（三井花廠とも言う）は、業界において長い間トップであった。雲龍は始めは華商により創設されたが、1893年になってから日中合弁の株式会社になり、1914年に三井の手に帰した。同社の規模は上海機器軋花局を越えて、資本金は銀10万両である。三井は雲龍を手中に収める理由について、「棉繰は十年前には相当有利なる企業にして三井物産会社が当地上海紡績工場と密接なる関係を有するため⁴⁾」と説明した。雲龍の製品は、当初は上海の各紡績工場向けだったが、1902年に三井が上海の紡績工場に投資してからは、自工場に供給するようになった。

三井の上海の紡績への投資急増に伴い、雲龍もさらに2工場を増設し、繰綿機械は230台に増えた。工場には80馬力と150馬力の2台の蒸気機関があり、1年の繰綿の生産力は68,250担に上った⁵⁾。1907年の第3工場設立後、地方や上海同業者の増加で競争が激しくなったため、生産は縮小され、生産高は4万～5万担に落ちたが、「繰綿を需要する紡績業と関係すると同時に他方に於いて棉実を利用する華昌搾油と関係せるより同工場を維持し居る⁶⁾」、即ち、同じ三井経営に属する上海紡や華昌搾油との関係により、雲龍は激しい競争に負けなかったのである。

表(1)は、雲龍と同時期に上海にあった主な繰綿工場である。雲龍を除く礼和・永茂・益泰・晋業などは、みな中国系が投資した企業である。雲龍を除いてみると、益泰は繰綿機械が最多の119台を有し、永茂は生産力がトップで、年に38,675担に達した。しかし、繰綿機械が230台、年に68,250担の雲龍の半分ほどの規模にすぎない⁷⁾。そして、1924年になっても雲龍は相変わらず「規模宏大なり⁸⁾」と評価されていたのであった。

(2) 石鹼製造業

近代中国石鹼製造業の中心である上海において、積善洋行を始めとして発展してきた日系石鹼製造業は、上海早期の化粧石鹼の生産分野でかなり優勢な状況にあった。

上海の石鹼製造状況について、1914年の領事報告では、「洗濯石鹼は久しき以前より製造せられたるも化粧石鹼は十年以前に積善洋行始めて之れが製造に着手⁹⁾」した旨が記載されている。上

表(1) 1914年頃の上海繰綿工場

工場名称	所在地	設立年月	経営者	機器台数	繰綿生産力	綿実生産力
雲龍三工場	厦門路 楊樹浦	1902	三井洋行 經理	230	68,250担	13,677.50担
		1903				
		1907				
礼和	北京路	1892	華商	59	37,050	61,873.50
益泰	厦門路	1905	華商	119	19,185	32,038.95
永茂	新閘路	1895	華商	114	38,675	64,587.25
晋業		1912	華商	60		

出典：「上海工業上における日本の地位」『通商公報』第二百四十二号，1915年8月，第673頁。

表(2) 近代早期上海における日系石鹸工場

設立年	工場名	所在地	設立者	備 考
?	積善洋行工場	?	?	
?	豊奏号	?	?	
1905	祥和	北河南路	井上助市	月に150箱
1909	瑞宝洋行	北四川路	粉川広吉	後上海油脂工業株式会社とも言う
1909	美華皂廠	?	?	年に三万打。1914年休業
1912	倫敦肥皂廠	閘北	井上政吉	倫敦洋行の工場。月に四～五千打。1914年ごろから化粧石鹸も製造
?	順和	?	?	

出典：『通商公報』外務省通商局，第十八号，1913年6月，第11，12頁。『支那經濟全書』第十二輯，東亜同文会，1906年，第642頁。

海の最初の化粧石鹸工場は、日本人の経営による積善洋行であり、その設立は1900年前後であったと推測できる。

その後、日本人の石鹸製造者が続出した。日系資本が化粧石鹸に集中したのは、「原料の点において本邦よりも上海の方遙かに有利」¹⁰⁾であったためである。内訳としては家内工業が大部分を占め、製品の品質不良で、開業して間もなく休業したものも多かった¹¹⁾。1913年以前に設立された規模が比較的大きい工場を整理すると、表(2)の通りである。

1913年に上海で経営されていた石鹸工場は6社で、日商は瑞宝洋行・美華皂廠・順和の3社で、ドイツ人経営の固本，残り2社は華商経営の祥生と合順であるが、「化粧石鹸の製造は一独逸人の経営を除き主として本邦人の経営する所たり」という史料にある通り、中国系工場の経営不振に対して、瑞宝は年産約12万ダース，美華は3万ダースを製造し，固本（年に20万ダース）に次いで上海で第二位を占めていた¹²⁾。

また，1909年に設立された瑞宝洋行は当初はそれほど大きくなかったが，製品の品質改良にとめると同時に販売ルートを持つ東亜公司に製品の販売を依頼した。その製品は中国の「農工商部の特許を得て沿岸貿易税及内地税を免除せられ居り」¹³⁾，揚子江沿岸や中国各地に販売された。

表(3) 1930年上海における資本金二十万弗以上の石鹼工場統計

工場名	国 籍	資本金	一日の生産能力
中国肥鹼公司	イギリス	五百万両	洗濯三千箱
瑞宝鹼廠	日本	五十万弗	化粧三千打, 洗濯二百箱
五洲固本鹼廠	中国	五十万弗	化粧一千打, 洗濯七百打
華豊鹼廠	中国	二十万弗	化粧一千五百打

出典：「石鹼製造業及同製造業者」「海外經濟事情」外務省通商局，第三年第51号，第65頁。

好調な売上が継続した結果，1911年に工場を拡張し，翌年合資組織となり，設備は石鹼煮造釜8個，煉石鹼機械として押出機1台，ローラ2台，削り1台，10馬力の電動機を有し，従業員は76人であった。1913年ごろ資本額は13200ドルで，製造力は1913年に12万ダースだったが，1914年には約40万ダースに達した。

瑞宝の規模は，1914年においてすでに「上海における化粧石鹼工場中首位にあり」という存在であった。¹⁴⁾1919年は合資から上海油脂工業株式会社に変更し，資本金をメキシコ銀500,000ドルに増額し，表3に示したように，1930年代に入っても依然として上海における有数の存在であった。

(3) ガラス工業

上海近代ガラス工業は19世紀末にはじまった。1882年英商・平和洋行と華商などにより中国玻璃公司在設立され，資本金は白銀10万両に達した。同年，華興玻璃公司在英商により創立された。以上の工場は経営不振で結局は失敗に終わった。

『日本の対支投資』を引用した日本・商工省商務局貿易課が1929年に発行した資料では，上海の最初の日系ガラス工業は既に1904年に創立されたと述べている。¹⁵⁾しかし，工場の名称や規模などについては一切言及されていない。また，1904年の「海外各地在留本邦人職業別表」やその前後の領事報告，特に上海におけるガラス業についての領事報告を調べると，1904年及びその前後に上海ではガラス工業に従事していた日本人は存在していないため，これは誤りと思われる。管見の限りでは，日本人のガラス工業の嚆矢は1911年に創立された日中合弁の宝山玻璃廠（宝山玻璃公司とも言う）である。工場の創立者の角田芳太郎は，1904年，中国に来て売薬などの商売をしていたが，ガラス製造工業の有位性に着目し，天通庵に小規模なガラス工場を興した。

この一帯は宝山について日系ガラス工場が多く設立された。1913年前後の上海には主に以下のようなガラス工場が存在した。亜林泰玻璃廠（Oriental Glass Manufactory Co.）・宝山公司・三公玻璃廠・松永玻璃廠・鳥羽玻璃廠・鳥崎玻璃廠という6社であり，そのうち5社は日系工場だった。唯一の非日系企業はフランス人経営の亜林泰玻璃廠で，規模から言えば上海で第一位であるが，債務超過で経営困難に陥ったため，1914年に日商の雲田卓雄に売却され，雲田玻璃廠と改称された。

こうして表(4)に示した通り，1914年になって「上海における硝子製造業の実権は殆ど本邦人の独占する所なり¹⁶⁾」という状況が出現したのであった。

1920年代に入ると，華商ガラス工場も続出した。1926年に経営中の企業は10社もあるが，その

表(4) 1914年上海におけるガラス工場

設立年	工場名	所在地	経営者	備 考
1911	宝山玻璃廠	天通庵	角田芳太郎	日中合弁。日本人職工数22人
1914	雲田玻璃廠	宝山路	雲田卓雄	日本人職工数50人。旧工場名は亜林泰玻璃廠
1914	新昌公司	宝山路	松永泰二郎	日本人職工数7人。旧工場名は松永玻璃廠
1914	永宝玻璃廠	宝山路	日人	日本人職工数19人。旧工場名は鳥羽玻璃廠
1914	飯田玻璃廠	天通庵	飯田春次	日本人職工数17人。旧工場名は島崎玻璃廠
?	三公玻璃廠	打鉄濱	藤井源太郎	日本人職工数は10人。
?	美華玻璃廠	華龍路	華人	日本人職工数8人
?	不明	海靱路	華人	日本人職工数10人

出典：『通商公報』外務省通商局，第百七十七号，1914年4月，第50頁。『大上海』内山清・山田修作・林太三郎，1915年，第573頁。

中で最も大きい怡昌玻璃廠は資本金15万ドルであった。一方，日系企業の宝山玻璃廠は順調に発展し，工場設立後に一切の経営管理権を握った角田芳太郎は，製品の改良と販路の拡大に力を入れ，利益を投資して業務を宝山顧家湾に拡充した。工場は設立間もなく，資本金は2万ドル，職工数は日本人14名，中国人36名を有し，設備として2馬力のモーター1台，容積400封度，坩堝が5個あり，年に36,000円の生産高に達した¹⁷⁾。1919年に，さらに資本金50万円（半額払込の届出）の株式会社に変更し，日本人が18人，華人は220人，電気モーター10馬力を有し，生産能力は一日800ドル，年間24万ドルに達した¹⁸⁾。

第一次上海事変直前に，宝山玻璃廠は既に日本人従業員は20人，華人は300人おり，電気モーター40馬力を有し，生産能力は一日2千ドル，年間50万ドルの大企業に発展し¹⁹⁾，更に「民国5（1916）年の後，上海市場におけるガラス製品の大部分は，日本資本の宝山玻璃廠によって生産・供給されていた。この工場には坩堝が10個ほどあり，ガラス日産量が1.5～2トン，職工が500～600人いた。生産される各種ガラス瓶と日用ガラス製品は，ほぼ上海の市場を独占しているありさまであった。いくつかの中国資本ガラス工場は，これと対抗するのが困難であった²⁰⁾」と評価されるとおり，上海における日系企業のシンボルの一つになった。

(4) 製革業

上海製革業は，1904年に英国人が創業した上海機器硝皮公司を発端とするが，その後の発展は順調ではなかった。1913年まで上海において経営されてきた製革工場は，日中合弁の江南製革公司・イギリス人経営の上海機器硝皮公司（The Shanghai Tannery Co.），中国人経営の鞏華製革廠・龍華製革廠という4社である。上海機器硝皮公司の規模ははっきり分からないが，生皮の使用が年に約7,000枚であり，これは江南の15,000枚の半数以下であるため，規模が小さいと推測できる。鞏華・龍華という両社の設立時期は，江南とほぼ同じであった。資本金は前者が30万両，後者が60万両に達しているが，江南を超えているが，開業して数年後，流動資本不足のため経営困難の状態を呈した²¹⁾。そして，1914年前後に休業に至った。

江南製革公司是1906年の設立で，龍華付近に位置した。当初は経営者の交代が甚だしく，後に日中合弁となった。合弁の時期について，史料不備のため正確に判断出来ないが，最初の出資者

表(5) 1930年上海における主な製革工場

	資本金	職工数	日産額	製 品	年産額	その他
中華皮革会社	80万元	100名	約50トン			
江南製革公司	15万両	118名	約50トン	紅色靴底・綠色靴底専ら製す		
上海皮革廠	14万元	85名		紅色靴底及び皮面革	90万元	伊人経営
大華皮革廠	30万元			紅色靴底・綠色靴底		
大隆皮革廠						閉鎖
威士廠			底皮40トン	紋皮・綠色靴底		始めは外人、後は華商経営

出典：「支那における製革業の概況」『経済月報』上海日本商工会議所第，44号，1930年，第437頁。

は、日本側は白岩龍平や古莊弘など、中国側は江孟聰である。そして大倉組もこれに関係した²²⁾。1912年12月に当工場は堀十郎を代表とする日本人の経営に移り、資本金15万円で、大日本皮革株式会社の子会社たる上海工場となり、日本人技師を雇って靴用甲革・靴底革等を生産し、年間生産額が20万円、1915年頃の最大生産力が年間約15,000枚で、大倉洋行がその製品の販売を請け負った。

そして、総資本額250万円の日本皮革の資金や技術援助を受け、1917年に上海機器硝皮公司を買収し、さらに發展する氣運を迎えた。

1919年になって、もう一つの日系皮革工場が登場した。それは華商龍華皮革廠を買収した中華皮革廠である。工場長である佐渡秀光は日本皮革株式会社と朝鮮皮革株式会社の創立に携わり、前者の工場長と後者の専務取締役を歴任した日本皮革業界の権威でもある。工場は翌1920年5月開業し、敷地面積は約29畝、動力は160馬力（蒸気120馬力・電動力4台40馬力）に達した。

1923年に、上海の製革工場の中で、最大の規模を誇ったのは中華皮革会社で、江南製革公司はこれに次ぎ、他方で華商工場は「数多あれども何れも小規模にして資本は一万弗を出ざるもの多し唯広生製革廠精益製革廠は稍々規模大にして資本約三十万弗を有す²³⁾」という状態であった。各社の生産能力として記録される数値は、中華皮革会社が底革一日120枚・調革40枚・水牛5枚・生水牛5枚で、合計170枚、職工数は300人、生産能力は一ヶ月底革約10万ドル、調革約10万ドルであった。江南製革公司はおおむね中華皮革会社の半分で、広生製革廠・精益製革廠は江南製革公司よりも更に小規模だった。

表(5)の通り、上海の製革業分野において1930年代に發展してきた日系工場は、資本力でも生産力でも相変わらず優位を占めており、日商は「資本は雄厚であり、生産力も強く、いかなる華商もその後塵を拝することができなかつた²⁴⁾」といわれ、「上海の製革業は概ね日本人によって掌握された²⁵⁾」という状況であった。

(5) 製麻業

中国は麻の生産地であり、麻加工業は古くから行なわれていたが、20世紀に入ってもその加工方法は古来からのものと余り変わらず、衣類用麻布の織布は全くの家内工業であった。例外として麻袋製造用の麻布製織にわずかに新式の麻加工業が存在した。東亜製麻株式会社の設立は、その状況を激変させた。

近代製麻工場は、清末に武昌に設立された湖北麻布局を嚆矢とする。製品は麻袋を主として、技術上の欠陥を克服すべく、1904年11月に日本から技師や男女工を招聘して、1905年中に工場の整備、機械の据付などを行ない、2～3の機械も運転したが、それは試験的に黒糸を紡績しただけだった。1906年、技師も揃い、職工の技術もかなり上達したので、2番目の工場の建設が始まったが、採算不能で遂に工場は休業の羽目に陥った。その後、中国の機械製麻業において活躍したのは、日系の東亜製麻株式会社である。

「本邦資本家ト中国有力者トノ合弁企業タル」東亜製麻株式会社は麻布・麻袋その他の製麻品の製織・売買及びその付随事業を目的として、資本金100万円で、1916年8月上海の労働生路に設立された。麻袋は農産種子の輸出包装用を始め、綿布や綿花の包装用にもよく使われる廉価で丈夫なものであり、その市場は非常に広い。日系資本がこれに目をつけて、前期準備仕事を通じて、1918年10月開業し、江南一帯、殊に長江沿岸各地に無尽蔵にある麻を原料として、廉価な現地労力を駆使し、まず需要の多い麻袋を製造し、漸次太物麻布より遂には帆布の製織も行い、1919年2月から、麻布の製織にも従事するようになり、「その製品に多大な注意を払い品質尤も佳良なるを以て市場に於て夙に高評を博し販路拡大到底需用を充す能はざるの盛況を極む」と評された。²⁶⁾

1920年2月に、東亜製麻株式会社は上海製麻株式会社を合併して、資本金は2,500,000円（払込1,250,000円）に増え、近代上海機械製麻業を長期間支配できる雄大な資本力と成熟した技術力を持つようになった。

(6) 絹糸業

絹糸業では、1902年に英国人が上海に工場を設立したが、まもなく失敗した。1906年、極司非爾路に日中合弁の上海製造絹絲株式会社（華名は公大公司）が設立される際は、「絹糸紡績業及び精乾棉業は……他国人は全く勢力なしとす」といわれたが²⁷⁾、設立後間もなく大企業に成長した。

同社は1906年7月に設立登記をし、取締役社長は李云書、取締役副社長は明渡知楡太郎、取締役は朱葆三であり、王一亭も関与しているが、会社の経営管理権はすべて日本側が掌握した。同年11月に運転を開始し、最初に絹糸紡績5,100錠を以って絹絲の生産を始め、職工数450人で、年間生産高は355担になっている。

1909年と1910年に楊樹浦にある廃業した紬糸紡績工場（ジャーディン・マセソン商会経営）の機械を2回購入し、蒸気機関は250馬力が増え、絹糸用スピンドル5,100錠持っているだけでなく、紬糸紡績機械も840錠あり、紬糸の生産も始まり、1年間の生産高は絹糸900担、紬糸450担である。製品の販売について言うと、絹糸は最初に中国国内向き販路の開拓に力を尽くしたが、「地遣生絲の比較的安値及中国機業家の固陋の爲め織物用としての發展十分ならざる」から、「近時本公司の製品は南洋向絹絲及印度向絹絲の輸出を主として」、「紬糸は主として中国内地向なり²⁸⁾」とした。原料は主として上海で購入し、絹糸はインド及び海峡植民地、紬糸は中国内地に販売していたのである。

1936年に到ると、同社は絹糸精紡機11,100錠、紬糸精紡機1,470錠、紡毛精紡機1,200錠、撚糸機は4,780錠、絹布織機は317錠を有し、日本人従業員は70人、職工は2,334人にまで発展、絹紡糸・紬糸・紡毛糸・平絹・本絹布類を製造していた。²⁹⁾

一方、1925年になって同類の民族工業が遅まきながら登場したが、生産規模などは上海製造絹

絲株式会社とは比べ物にならない貧弱なものだった。³⁰⁾

以上、1915年に在上海日本総領事館総領事の報告でふれられた絹糸・製革・製麻・ガラス・化粧石鹼・繰綿業をめぐって、日系企業の占める位置について見てきたが、実際には、1915年以後の日系企業は以上の業種のほかにも別の分野でも重要な存在感を示した。

(7) シルク染色

シルク工業に付随する精練・染色・印花業は同類の外資産業の上海進出以前から、既に存在していたが、昔から伝統的な「土法」のままで、技術は原始的で、設備は粗末で、上海の綿紡績工業と織糸工業の迅速な発展に比べて著しく遅れていた。

外国資本の中で、始めて上海の精練・染色・捺染業に手を染めたのは日系企業であった。

日本の精練・染色・捺染の近代的技法を上海に始めて導入したのは、日系絹織物商ではないかと思われる。例えば、横浜市に本店を置く三笠洋行は、1904年に上海に進出して絹織物貿易を営み、同時に染色部を設けて染色業務にも従事した。それから、田岡絲光染廠（1912年に田岡洋行により創立、綿糸・シルケット絲等の織布原料を染色³¹⁾）、永隆印染廠（1912年に創立、シルクプリント³²⁾）、上海精練公司（1917年4月に2万円で新開橋北首烏鎮路口に設立、絹綿布の精練再整³³⁾）、大昌精練染色公司（1919年中日合資で創立、精練・染色・整理³⁴⁾）、中華染色整練会社などが続々創設された。

その中の、中華染色整練会社はやがて上海一流の染色整練業者へと成長した。同社の経営者は竹松貞一で、「年少にして横浜市塩崎染織工場に染色工業に従事」し、1914年に上海の三笠洋行に入店して、染色部の業務を担当し、現地の情報を十分収集して、1919年10月に独立、同年に土慶路に銀15,000ドルを資本金として、合資会社・中華染色整練会社を設立し、絹綿布の染色精練を専門とした³⁵⁾。そして、横浜市塩崎染織工場に8年間勤務し、染色技術を十分に身につけている後輩の吉田武夫を工場長に招き、技術力を高めた。

会社は1921年より個人経営に変わり、資本金は1929年で銀150,000ドル（全額出資）に上り、年生産能力は銀120,000ドルで、職工数は175人に達した。更に、1931年に株式会社に組織を変更し、資本金は20万円に増えた。

工場の規模としては、中華染色整練会社に比肩するのは、同時期の民族工場の中で大昌精練染廠だけであり、同工場は資本金15,000円で、職工数は60人である。その他の工場は資本金4万円以下の小規模工場である³⁶⁾。

(8) 魔法瓶

近代上海は中国の魔法瓶の生産地としても知られているが、「上海における魔法瓶製造は上海事変前迄は邦人の殆ど特占の工業なり³⁷⁾」と言われた。

上海の華商工場が第一号の魔法瓶を作り出したのは1925年であるが、日系の金泰冷熱水瓶廠は1926年に既に営業しているから、その設立は遅くとも同年であろう。同工場は誠華熱水瓶心廠と金泰製罐廠との合併によるものであり、魔法瓶内部（瓶心）の生産技術を当時華商は持っていなかったため、誠華熱水瓶心廠が日系工場である可能性がかなり高い。そうであるなら日系魔法瓶工場が上海に登場した時期は華商と大体同じか或いはもっと早いと考えられる。

金泰冷熱水瓶廠は資本金20,000円で、日本人3人、及び華人35人を使って、日に瓶心1,200個・瓶殻800個を生産する能力を持っているが³⁹⁾、設立後間もなく流動資金難に陥り、華商・甘蘭

南が出資し維持に努めたために一時好調に向ったが、出資者間の意見が一致しないため、1930年に東方熱水瓶心廠と立興熱水瓶廠に分かれた。東方は日系経営だが、立興は甘蘭南を經理として経営が続けられ、1931年に完全に華商の経営に帰した。一方、東方は第一次上海事変後経営困難となったため、立興に売却されその第二工場として存続した。

30年代末の銀価暴落と関税引上げと、魔法瓶の需要も激増したため、上海における魔法瓶工場が急増し、殊に日系企業の上海進出が目立った。

まず、現地ガラス業のトップである宝山玻璃廠は魔法瓶業の売行の好調を鑑みて、1930年に40,000ドルを投資して、横浜路に美芳熱水瓶廠を創立し、瓶心・瓶殻・料瓶を作り、「霍鼎卡式」⁴⁰⁾瓶心製造機を装備し、瓶心の「産量は全市において最大」であった。

美芳に継いで、正泰・宝泰・金生・宝生・人和・華成という日系6工場が設立され、「規模は美芳が最大で各工場の設備は完全で技師を除く外製造方面は悉く中国人を使用し」た。同じ時期に華商の魔法瓶工場は続出したが、「日本人工場より製出する瓶心・料瓶（瓶心を焼かざる未製品）の多くは華商工場に供給する。瓶心の製造は技術容易でなく且又設備も煩雑である故中国人工場では未だ設備するもの無く均して日商から購買する」⁴¹⁾という状況であった。

また、第一次上海事変直前に、隆昌熱水瓶廠という日系工場が設立され、同工場は2時間以内に銀メッキ瓶心を生産できる優れた設備を持ち、「本業のうちで設備が最も整って」⁴²⁾いた。

以上見てきたように、日系工場は設備も技術も華商を遙かに上回り、この意味では「邦人の殆ど特占的工業なり」と言える。しかし、第一次上海事変後、正泰・宝泰・金生・宝生・美芳・人和・華成などは何れも業務を停止した。

事変後に残った日系工場は、中南熱水瓶廠だけである。この工場は宝成玻璃廠の経営者である沢田又一が工場の隣接地にある工場を合併し設立したもので、魔法瓶の排気真空加工を営み、排気ガスポンプ十台を備え、日産二千本の加工能力を有し、「現在邦人唯一の魔法瓶工場」であった。事変後、華人工場が簇出したが、「加工技術の優秀なるを以て他を圧倒し居れり」と⁴³⁾、上海における日系魔法瓶工業の最後として気を吐いた。

(9) 坭塢・ヤスリほか

また、坭塢・ヤスリ・捺染用銅ローラーの彫刻などの分野でも、日系企業は長い間上海業界を独歩していた。

坭塢はガラス・料瓷・琺瑯などを生産するには欠かせない道具であったが、「すべて日本より購入」⁴⁴⁾していた。1921年5月小畑寅吉などがメキシコ銀貨40,000ドルを資本金として、合資会社上海坭塢合資会社を横浜路に創設し、坭塢などの耐火材料を生産して、上海市場の一部の需要を満足させた。華商が同製品の生産を始めたのは、1930年の益豊搪瓷廠坭塢生産部の設立からである。

ヤスリは金属機械製造・修理業に必要なもので、宮脇寅治は1918年に中日化工株式会社の工場を譲り受け、協怡化工廠と改称してヤスリの製造に切り替えた。この工場は閘北に約600坪の敷地を有し、工場建坪は約300坪で、「鑄製造は当工場開業当時は上海において同業殆どなく華人方面二、三ありたるが、これ等は何れも修理工場に過ぎず、全て輸入品により供給せられる、の有様なりしにより」⁴⁵⁾。だが、その製造活動はあまり長く続かなかつた。1934年に、「斯業の将来性に着眼して」、野村木廠の支配者野村久一は上海銼刀廠を平涼路に設立した。⁴⁶⁾規模が小さいながら、

上海の唯一のヤスリ製造工場と言える。

近代上海は紡績業および織布工業の都と言われるが、それに付随して染色加工業も次第に発達し、殊に1930年代前後の関税引上などにより上海の染色加工業が急速に發展する気運が見られた。しかし、当時の上海では染色業に対して肝心な「印花機の捺染用銅ローラー彫刻の技術は、一般の工場は持っていない⁴⁷⁾」という状況で、この技術を持っているのは数軒の日系家内工業以外にはなかった。1934年に銅ローラーの彫刻を専業とする上海彫刻廠（中華彫刻廠とも言う）と順治彫刻廠が設立された。順治彫刻廠は和歌山県出身の高木留蔵により1934年11月に設立され、出資額は15,000円で、7台の機械を持ち、一日に銅ローラー4本を彫刻した。上海彫刻廠は奥村信二郎と服部久蔵の合資により設立されたものである。もともと奥村は大阪で紡績用機械などを販売し、服部は静岡県で彫刻工場を経営していたが、資本金20,000円でこの工場を共同で楡林路に創設した。この2社は投資額こそ少ないが、この業種での長く重要な位置を占めていた。華商各廠が捺染用銅ローラーの彫刻技術を身につけるのは40年代後期になってからのことである⁴⁹⁾。

また、製油・製粉業においても日系企業は強い勢力を示したことがあるが⁵⁰⁾、比較的短期だったため、ここで挙げない。

以上の事実をみるだけで、日系企業は少なくとも絹糸・製革・製麻・ガラス・化粧石鹼・繰綿業・精鍊・染色・捺染・魔法瓶などの工業分野で、上海において極めて重要な役割を担っていたことがわかる。

3. 日系雜工業の役割

日系企業は小規模のものが多く、マニファクチュア的な存在と言われるが、上海近代工業發展史において先駆的な役割を果たしたことは無視できない事実である。

繰綿業・絹糸・製麻・化粧石鹼業・ガラス業・精鍊・染色・捺染・魔法瓶・ゴム・電球⁵²⁾などの工業分野でいち早く近代工場を興して成功したのは、まさに日系工場であった。規模は小さいものもありながら、以上の各分野の嚆矢であり上海の近代工業のパイオニアであったことは意味深い。

上海民族雜工業の誕生と發展にはひとつの決まった流れがある。すなわち、先に日系企業が登場して、その後華商が同業種に参入し、しだいに斯業の主流を占めてゆくというパターンである。華商にとって、日系企業からの直接的で甚大な影響は無視できないものであった。

上海ガラス工業の發展史について、1925年の現地の邦字紙は次のように説明している。日系ガラス企業の中には上海での営業前に、ガラス業に手を出したが「何れも失敗に帰したるが偶偶支那内地に於て日本人等の経営に依り洋燈ホヤ薬瓶化粧瓶等の製造に従事するもの増加し割合に好成绩を示したるを以て支那人亦之に倣い現今に於ては上海を首とし各地小規模たる工場を經營するもの漸次増加しつつある⁵³⁾」。つまり、華商工場が日系工場を模倣して次第に増加していったことがわかる。

上海のガラス工業の發展はそれを裏づけている。表(4)の示した通り、1914年ごろ上海ガラス工業において日系企業が独占的な地位を占めていたが、わずか3年後の1917年には、日系企業は雲

田号・三公号・宝山の三軒しか残っていないが、公益・中華・華利・華康・康泰などの華商工場が現れており、1921年になると、華商工場は更に8社に増加し、上海ガラス業の繁栄が見られた。

精錬・染色・捺染業では、三笠洋行をはじめ、1919年までは田岡絲光染廠・上海精練公司・大昌精錬染色公司・永隆印染廠・中華染色整練会社・松岡洋行⁵⁴⁾などの日系企業が設立されたが、精錬・染色業では、日商工場の「営業はさかんで利潤は厚く、華商が前後して新式の鍊坊(精製所)と精錬工場を開設するきっかけとなった」。それで、1920年代のはじめから新式工場が多く現われた。捺染業では、日系工場をモデルとして「中国人はつぎつぎにこれに倣った」、[1919年欽英齋が成都路に中国機器印花廠を開設してから、我が国人は日本の方法に倣い絹織物プリントの新しい方法が採用された。]⁵⁵⁾中国機器印花廠をはじめ、1920年代に華商工場は10軒以上設立され、中国市場において上海シルクプリントのトップブランドとしての地位を確立させた。

上海ゴム工業は日系企業に起源を有する。第一次世界大戦中、日系資本が上海に進出し、ゴム工場を前後して2軒設立した。嘉興路橋のたもとにある上海華興橡皮工廠と、東熙華徳路公平路の近くにある亜細亜橡皮廠⁵⁶⁾である。前者は1922年に資本金3万円の合資会社となり、代表者は梶川多三郎である。1922年に、亜細亜橡皮廠は華商・張礼林により買収され、亜洲橡皮廠となった。

そして、1923年に土屋洋行の工場(日中合弁)と慶徳橡皮廠が設立された。後者は東京右川ゴム製造所(右川慶治経営)と上海清和洋行との両者が協議を重ねて設立された。設立当初の製品はゴム毬とゴム玩具類だった。

1924年になって日系工場は更に2社設立された。協隆橡皮廠(資本金は20,000円 製品は靴底ヒルなど)と、日中合弁の華豊橡皮廠(資本金は20,000円、靴底ゴムマリヒルなどを生産)である。

このようにして、1924年まで、日系ゴム企業は日中合弁を含めて少なくとも6社が設立された。一方、1919年の中華製造橡皮有限公司の設立を発端とする上海民族ゴム工業は、同時期には模範工廠や永生源のような小さな工場が3・4軒あっただけで、発展を迎えたのは1927年ごろからであった。⁵⁷⁾上海民族ゴム工業の勃興には日系工場の先導も一役買ったと言えよう

絹糸製造業では、1902年に設立されたイギリス人工工場はまもなく破産したので、華商は同業への投資意欲を起さなかった。上海製造絹絲株式会社は設立後、順調に発展して良い業績を収めたため、「我が工商界はその営業の発展と販路の拡張を羨み、注意をむけるように」⁵⁸⁾なった。そして、1922年に上海の巨商である朱節香は日本人の協力で中和絹絲廠を創立し、失敗を重ねたが、1925年に遂に中孚絹絲廠の経営に成功した。上海製造絹絲株式会社の設立と発展は、華商の絹糸業の嚆矢と言われる中和絹絲廠の創立に強く影響したと言えよう。

美しい図案をプリントした鉄罐や瑤瑤鉄器は20世紀の初めから多く上海に輸入され人気を集めたが、まず機械で鉄罐を生産したのは日系工場である。1916年合資会社永昌機器製罐廠は宝山県顧家湾に設立され、資本金2万ドル、機械40基、鋼鉄型200種、職工37名、7馬力半の電機動力を擁し、洋鉄と金属容器の製造販売などを営業内容にして、年生産高は6,000ドルに達していた。⁵⁹⁾上海初の規模の機械製罐工場として、その影響は想像できるだろう。

1919年まで上海に於いて製缶業を経営している工場は、永昌機器製罐廠・上海製罐廠(1917年以前斐倫路に設立、経営者は岡村有造・經理は岡村正一)⁶⁰⁾・商務印書館製罐部(設立後間もなく廃止)⁶¹⁾の3廠しかない。そのうち2社は日系である。第一次世界大戦の影響で、化粧品その他の缶製容器の需要が激増した際、以上の工場がモデルになり、製缶工場が12軒に増加した。そして、1921年に、

上海において電動力使用の主要機械を4～6台（附属機械50～100台）有する工場は4社で、華商は3社（華盛製罐廠など）になり、日商1社（上海工商公司）だけだった。⁶²⁾その後、華商工場の製缶業とホーロー鉄器業とは共に発達し、中国における上海の製缶・ホーロー鉄器業の王者としての地位を固めた。

日系企業が新製品、新技術を有する近代工場を設立・経営したことが、中国民族資本の模倣・追求の手本となって華商工場の設立を導く役目を果たし、上海近代民族工業の誕生を促したことは、以上の例により十分立証できるだろう。

また、先端技術をもたらした日系企業が近代工場のモデルとして技術面で直接・間接に上海の中国民族工業の発生・発展に大きく貢献したのも客観的な事実である。

民族工業が外資工場の技術をどのように直接利用したかについて、以下のように指摘されている。民族工場は「往々にして外国資本が上海に設置した工場の有利な条件を利用し、方策を講じて人材と技術を獲得した。たとえば、密かに人員を派遣して外国資本金工場の職工としたり、あるいは外国資本金工場の技術者をヘッド・ハンティングして、直接的に外国資本金工場の機械設備や生産技術などに関する各種の資料を獲得、後にこれの比較・分析を経て、外国工場製品にも勝る製品を開発したのであった」。⁶³⁾日系企業も当然その「外廠」に属している。

上海に逸早く進出した日系印刷業はその好例である。日本の鉛活字が上海の印刷工場で使用される前の、上海の鉛活字の印刷物は理想的なものとは言えなかった。作新社が設立されてから、「その本はすべて鉛印刷で、字体も色もきわめて精巧で上海の各印刷所のものとはまったくちがう」⁶⁴⁾と評された。そこで、文明書局・商務印書館・中国図書公司等、作新社を新技術のモデルにこれに倣い日本の鉛活字の導入に力を注いだ。⁶⁵⁾

また、同じ印刷業の商務印書館の成長も、日系工場及びその技術によるところが大である。商務印書館は1897年設立当初は「小さな印刷所で設備も簡素」であったが、1900年に上海の日系印刷工場である修文館（1884年設立。修文書館、修文印刷局とも言う）を買収したことで、設備も技術も一新され、「商務の基礎を固めたはじまりはここである」と言われている。⁶⁶⁾1902年に新式学校開設の必要に応じて、商務印書館は教科書の編集・印刷を始めたが、教科書の大量印刷のニーズに応じられなかったため、1903年に東京の金港堂主・原亮三郎が出資し、商務は「日中合弁ノ模範事業トシテ設立セラレタル」。⁶⁷⁾合弁後の商務印書館は資本金60万両に急増し、技術力も飛躍的に高められた。合弁の十年の間に、日本国内から優秀な技術者が商務印書館に派遣され、新技術や新設備が多く取入れられて、商務印書館の事業は順調に進んで大きな発展を遂げた。⁶⁸⁾この十年間の業務提携は商務印書館の成長にとって、極めて重要な役割を果たしたという事実が認められるだろう。

ガラス工業の場合、前述のように1914年前の上海には日系工場と仏系工場だけがあった。当時の上海にはガラス製造技術を持つ現地人はいないから、日系工場の技術者がすべて日本人であっただけでなく、仏系工場も日本人を多く使っていた。1913年に上海でガラス製造販売に従事した日本人が151人（家族を含む）⁶⁹⁾おり、雑工業従業者の中で人数が最も多い。このように数多く存在した日本人の技術職工は技術移転・拡散の中心になり、上海民族工場の設立・技術の確立に大きな役割を果たしたに違いない。

魔法瓶工業では、第一次上海事変まで、上海には華商と日系魔法瓶工場が多く登場したが、日

系工場は「各工場の設備は完全で」技術は成熟しているのに対して、設立当初の華商工場は、前述のように「瓶心の製造は技術容易でなく且又設備も煩雑である故中国人工場では未だ設備するもの無く均して日商から購買」していた。このため華商は日系工場の生産技術の習得につとめ、「そして之等工場に勤務したりしものにして独立又は資本家を勧誘して本工場を設立する」事例も出てきた。こうして1932年ごろには、「その生産能力は自給自足の域迄に到達⁷⁰⁾」し、華商工場の経営も成功した。

ホーロー製品に使用する原料品の瑯粉は最初日本から輸入されたが、その後日本人の和田千太郎は上海恒豊路に和田瑯粉釉薬廠を起して、瑯粉釉薬を生産し上海市内各廠に供給した。和田瑯粉釉薬廠の生産した瑯粉釉薬は品質はそれほど高くなかったが、上海唯一の工場だったため、その製作技術は華人の模倣の対象になった。鑄豊廠の創業者である童世亨の回想によると、「当時の同業者で利益が上がっていたのは豊中と中華の両工場だけであり、他はみな規模も小さくて設備も整っていないかった。必要な瑯粉や原料はみな日本からの輸入であり、まだ自国での製造はできなかつた」とある。和田瑯粉釉薬廠の設立後、「その製法をしだいに中国人が探りはじめ、まず益豊搪瓷廠が号斜橋付近に工場を設けて模倣製造し、鑄益・豊益もその試みに成功した」というわけだ。つまり、和田瑯粉釉薬廠の瑯粉釉薬の生産技術を「探知」することを通じて、その製作方法を習得し、益豊と鑄豊は名実通りのホーロー工場になった。そして、華商の瑯粉の生産開始により、「和田の営業は大打撃を受けて維持できず、工場の全資産がすべて鑄豊に吸収合併された⁷¹⁾」との結末に至る。その技術者である田村与太郎も鑄豊に雇われ、鑄豊も益豊もその後上海一流のホーロー工場に発展した。

前述のように、近代精練・染色・捺染の上海進出以前は、技術も設備も原始的だったが、日系企業の進出でその新技術がすぐ民族工業の模倣の対象になり、新技法を用いる工場が勃興した。精練・染色の場合、上質なシルク織物を染色する前に、精練する必要がある。現地工場は桑などの灰で精練する原始的な方法を用いていたが、日系企業は「新方法で精練を行い、営業はすこぶる成功している。このため我が国人の模倣を引きおこし、新式の鍊坊を設立し、染色も兼営している⁷²⁾」とされる。また、シルクのプリントであるが、上海の工場がその技術を使用するのは日系工場の設立以後のことである。「20年代に日本人が上海に絹織物プリント工場を創設した後、中国人は次々と模倣している」と記録され、日系工場の使っている「日本製の型紙は質が高く、わが国の各プリント工場も前後して日本製品を用いるようになった」という動向を示した。そして、プリント用の道具も簡単なものまでも日系工場に倣って、日本から輸入してきたものである⁷³⁾。こうした全面的な技術移転によって、上海のシルクプリント業の繁栄もたらされた。

4. おわりに

企業の規模や斯業に占める位置を論じるのには、当然同業種内で比較対象として論じるべきであろう。近代の上海における日系綿紡績工業（在華紡）との規模の比較した場合、日系雑工業はたしかに零細・弱小である。しかし、斯業の中では長期にわたり重要な位置を占めたに日系企業も多くあっただけでなく、規模的にはトップクラスのものも少なくなかったことがこれまでの論

証で明らかになった。

上海近代工業を論ずるのに日系雜工業の再評価が必要であることは疑いを俟たないだろう。

不平等条約の保護下で設立・経営された日系企業は、民族工業に対して当然マイナスの影響を及ぼした側面もあるであろう。

しかし、以上見てきたとおり、上海雜工業の牽引役として日系企業の果たした役割は非常に大きなものであり、直接的にも間接的にも民族工業に多大な影響をもたらした。こうした意味で、上海近代雜工業を論じるのに、日系工場は欠くことのできない存在であると言える。日系の「国策企業」とは無縁な中小資本の雜工業においては、日系企業は「幣」よりむしろ、「利」が大きかったと言えよう。この点についてはまた稿を改めて論じてみたいと考えている。

注

- 1) 在上海日系雜工業についての先行研究は、管見の限り以下の通りである。張肖梅『日本対滬投資』（1937年）は上海事変前後の在上海日系雜工業について簡略に記述し、主に雜工業各工場の概要（主に資本状況）について表している。樋口弘『日本の対支投資研究』（1939年）、東亜研究所『日本の対支投資』（上）（1942年）、杜恂誠『日本在旧中国的投資』（1986年）は日本資本の中国における雜工業投資について論ずる際、在上海日系雜工業に多少ふれている。
- 2) 「上海工業上における日本の地位」『通商公報』外務省通商局二百四十二号、1915年8月、17頁。
- 3) 汪敬虞『十九世紀西方資本主義對中国的經濟侵略』、人民出版社、1983年、404～407頁を参照のこと。
- 4) 「上海工業上における日本の地位」『通商公報』二百四十二号、1915年8月、25頁。
- 5) 同上。
- 6) 同上。
- 7) 同上。
- 8) 『上海事情』外務省通商局、1924年、107頁。
- 9) 「上海における石鹼及蠟燭製造状況」『通商公報』百七十八号、1914年12月、17頁。
- 10) 「上海工業上における日本の地位」『通商公報』二百四十二号、1915年8月、27頁。
- 11) 「上海における石鹼及蠟燭製造状況」『通商公報』百七十八号、17頁。
- 12) 「上海における石鹼の製造及輸入」『通商公報』十八号、1913年6月、12頁。
- 13) 「上海における石鹼及蠟燭製造状況」『通商公報』百七十八号、1914年12月、18頁。
- 14) 「石鹼及蠟燭製造業者（上海）」『通商公報』百七十八号、1914年12月、54頁。
- 15) 『日本の対支投資』（上）東亜研究所編、原書房、1974年復刻、263頁。
- 16) 「上海工業上における日本の地位」『通商公報』二百四十二号、1915年8月、29頁。
- 17) 『在支那本邦人進勢概覽』外務省通商局、1919年、27、28頁。
- 18) 『上海内外商工案内』上海日本商業會議所、1926年、53頁。
- 19) 『上海内外商工案内』1929年、34頁。
- 20) 賀賢稷『上海輕工業誌』、上海社会科学院出版社、1996年、283頁。
- 21) 「上海における製革業状況」『通商公報』百八十二号、1915年1月、5頁。
- 22) 『対支回顧録』（下巻）東亜同文會編、原書房、1967年復刻、683頁。「上海工業上における日本の地位」『通商公報』二百四十二号、1915年8月、27頁。
- 23) 「製革工業状況 [上海]」『通商公報』一〇六八号、1923年7月付録、6頁。
- 24) 『中国經濟年鑑』商務印書館、1936年、(K)514頁。
- 25) 『上海之工業』上海特別市社会局編、1930年、48頁。
- 26) 長岡笏湖編輯『支那在留邦人興信録』、東方拓殖協會、1922年、671頁。

- 27) 「上海工業上における日本の地位」『通商公報』二百四十二号，1915年8月，21頁。
- 28) 同上，22頁。
- 29) 『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）上海興信所，1936年，315頁。
- 30) 上海特別市社会局編『上海之工業』，1930年，32頁。
- 31) 「支那における日本人経営の事業概況」『支那』第十卷第一号，東亜同文会調査編纂部，1919年，77頁。
- 32) 『中国近代紡績史』編輯委員会編著『中国近代紡績史』（上巻），中国紡績出版社，1997年，262頁。
- 33) 『在支那本邦人進勢概覧』外務省通商局，1919年，21頁。
- 34) 『中国近代紡績史』（上巻）262頁。
- 35) 「上海に於ける日本商工業進展状況」『通商公報』七〇六号，1920年2月，25頁。また，同会社の設立時期について，1912年説（『近代江南南絲織工業』263頁）・1918年説（『上海内外商工案内』1929年，39頁）などもある。
- 36) 徐新吾主編『近代江南南絲織工業』，上海人民出版社，1991年，264頁を参照のこと。
- 37) 『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）755頁。
- 38) 『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）207頁。
- 39) 侯厚培・吳覚農『日本帝国主義対華経済侵略』，黎明書局，1931年，246頁。
- 40) 『上海之機制工業』上海市社会局編，1933年，274頁。
- 41) 「上海の魔法瓶製造工場」『海外経済事情』外務省通商局，六年5号，29頁。
- 42) 『上海之機制工業』274頁。
- 43) 『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）755頁。
- 44) 何躬行『上海之小工業』，中華国貨指導所，1932年，90頁。
- 45) 『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）182頁。
- 46) 『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）409頁。
- 47) 『中国近代紡績史』（上巻）126頁。
- 48) 『上海内外商工案内』1935年，59頁。
- 49) 中西利八編輯『中国紳士録』，東京満蒙資料協会発行，1942年，958頁。『中華全国中日実業家興信録』（上海の部）603頁。
- 50) 『中国近代紡績史』（上巻）126頁。
- 51) 1914年上海には14社あり，外国企業は三井の増裕だけだった。24時間の生産能力は，増裕は第4位，2,000袋に達した（「揚子江沿岸における製粉業状況」『通商公報』第百七十七号，20頁）。製油業における日系企業の地位は『楊子江の富源と需給』（上海出版協会調査部，大正14年）254頁を参照。
- 52) 『上海工業概覧』（69頁）によると，上海の電球工業は「民国初年，日人博利安在楊樹浦設電燈泡廠為先，後奇異安迪生電泡廠於勞勃生路設，規模大，日商不敵閑閉」とある。
- 53) 「上海に於ける硝子工業状況」『上海日本商業會議所週報』上海日本商業會議所，704号，1925年8月27日，466頁。
- 54) 『近代江南南絲織工業』（269頁）などによれば，民国初年に松岡洋行という日系工場が設立された。
- 55) 『近代江南南絲織工業』263，267～269頁。
- 56) 中国社会科学院経済研究所主編『上海民族橡胶工業』，中華書局，1979年，7頁。
- 57) 『上海民族橡胶工業』12～15頁を参照のこと。
- 58) 『上海之工業』32頁。
- 59) 『在支那本邦人進勢概覧』1919年，29頁。
- 60) 『上海行名簿』中国商務学会，1917年，189頁。
- 61) 『上海之機制工業』57頁。
- 62) 『上海日本商業會議所年報』（第四）上海日本商業會議所，大正十年版，99頁。
- 63) 黄漢民「外貨競与上海近代民族工業產品的演化分析」『上海研究論叢』第三輯，上海社会科学院，

1989年，190頁。

- 64) 『上海之工業』110頁。
- 65) 『上海之機制工業』51頁。
- 66) 王益「中日出版印刷文化的交流和商務印書館」『商務印書館一百年』商務印書館，1998年，383頁。
- 67) 『在支那本邦人進勢概覽』1915年，38頁。
- 68) 范慕韓主編『中国印刷近代史』（初稿），印刷工業出版社，1985年，176，258，553，565，573頁，及び「中日出版印刷文化的交流和商務印書館」（前掲『商務印書館一百年』に収録）を参照のこと。
- 69) 『海外各地在留本邦人職業別表』外務省通商局，大正2年6月。
- 70) 「上海に於ける魔法瓶生産状況」『海外經濟事情』第六年第2号，53頁。
- 71) 陳真・姚洛合編『中国近代工業史資料』第一輯，三聯書店，1957年，567頁。
- 72) 『中国近代工業史資料』第一輯，321頁。
- 73) 『近代江南南絲織工業』263，267，269，274頁を参照のこと。